

---

# Waltz for Debby

古藤正志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Waitz for Debby

### 【ノード】

N4987F

### 【作者名】

古藤正志

### 【あらすじ】

梅雨のある金曜の夜、行き着けのバーで僕は酒を飲んでいた。見知らぬサラリーマン風の二人の男が入ってくる。一人は自分を失うほど酒に酔っていた。彼は何か悩みを抱えているらしかった。ひょんなことから家に運び込むことになってしまつ。彼が抱えているものとは……

そう。今は梅雨の時期だった。

やつと思いつかせるくらい久々の雨が朝から降り続いていた。あと一日で六月も終わるというのに今月に入つてから三日も降つていないのではないだろうか。溜めていた仕事を月末に一気にこなそうとする様は、月末の銀行員の仕事ぶりと同じようだつた。

今年の梅雨は、時期が遅いわけでもなく、短いらしい。それも極端に。メディアでは連日、異常気象についての報道がなされていた。一昔前、Jリーグで活躍した外国人選手と似た名前らしいことは知つても、どんなものなのかも興味がないし、いつ梅雨入りしたかもよくわからない。晩の暇な時間を潰すため、いつものようにバーに出かけた。

店に入ると、客は若いカップル一組だけだつた。テーブル席に向かい合つて、バーには珍しく豪勢なディナーを賑やかに食べていた。カウンター一番奥のスツールに腰掛け、セッターに火を点けた。一分ほどしてから厨房から滝本くんが現れた。気付かなかつた非礼を詫び、すぐに灰皿を置き、おしほりとメニューを出した。

僕はもう常連と言つても差し支えはないのだろうが、毎回メニューに目を通してからオーダーする。特に理由はない。

「ビールを。アサヒで」

僕はバーに限らず酒を置いている店ではいつもビールを最初に注文する。メニューは一杯目から見ることになる。

「わかりました。いつものですね」

につこりと笑い、ボックスタンブラーの中からビールより冷えているであろう氷漬けになつたグラスを取り出し、慣れた手付きでビールをゆっくりと注いだ。グラスはタンブラーというにはあまりに細長いものだ。グラスに浮かんだ水滴をさつとふき取り、コルク製のコーケス

の上にゆっくりと置いた。表面張力が効いた水面のようにギリギリに保たれた泡はフツフツと音を立てた。ソフトドリンクといいビルといい、こういう店では凝った物にしてくれる。もちろん中身は既製品だ。僕にとっては中身が変わらない以上、どっちでもいいのだが、腕を磨いたバーテンの手付きを見るのは嫌いではない。

しばらくしてカップルは店を出て行った。男の方と一瞬目が合つたが、僕の姿は視界に入っているだけで、頭の中はどうセックスに持ち込むかその過程をシユミレートしているのが容易に見受けられた。女の方は男に肩を摺り寄せヨタヨタと歩いていった。

彼のことを女は狼というのかもしれない。酒を飲ませて事に及べば、下手すれば準強姦にあたる。いや、女の方は酔つた演技で男をベッドに誘い込むのかもしれない。狼か狸か。彼らが一夜の関係なのか付き合っているのかはわからないが。

それから一時間、僕と滝本くんはポツポツ話し、いつの間にか僕は考え事を始め、彼もこれから来る客のために氷を整形し始めた。彼も考え事をしているようだつた。バーテンダーにも色んな人間がいるが、彼は大人しい方ではない。僕と歳が一つしか離れていないこともあり、僕らは話が合つた。こんなに話さないのは珍しい。悩み事があるのかもしれないが、僕は自分から訊くようなことはしない。

「」のマスターは、フランス映画に出てくるようなバーテンで自分から話しかけてくるようなことはまずない。もちろん客が話し掛けてくると、話し相手にはなる。基本的に寡黙な男で、口ではなく腕で語る生糸のバーテンダーだ。

考え方をするネタを探すことも飽きた僕は、天井の際に置かれたスピーカーから流れる音楽に耳を傾けた。ボサノヴァ調の曲で、歌詞を辿つていると、MISIAの『Everything』をアレンジしたものだと気付いた。そういうえば、ここでインスト以外の音楽を聴くのは初めてかもしなかった。今、流れているのは滝本く

んが選んできたものだろう。

いつもはジャズ、特にジャズピアノの比較的ポピュラーなものが流れている。ビル・エヴァンスやオスカー・ピーターソンが多かつたようにも思える。ここはジャズバーではないから、フリー・ジャズなどはまずかけない。いつだつたか、僕とマスターしかいない時に店の奥からレッド・ガーランドのレコードも取り出し、珍しく、熱く語ってくれたことがある。マスターはフリー・ジャズが好きらしい。

次の曲に移つた。今度はいよいよわからなくなつた。

カップルが店を出てから、客は一人も来なかつた。給料日後の金曜の夜にしてはかなり珍しい。先週の金曜は、給料日前にもかかわらず一軒目に立ち寄つたと思われるサラリーマンがまとまって来ては次の店に移つていつた。今日は雨だ。それも久々の大雨だ。僕は四杯目を注文した。他にすることのなくなつた滝本は、僕に断りを入れてからタバコを吸い始めた。取り出したタバコはKOOI。若者には一番人気があるらしい。女ウケが良いのが大きな理由と聞いたことがある。彼がタバコを吸う姿を見るのは初めてだつた。マスターはタバコを吸わない人だから控えていたのかもしれない。一本吸い終え、もう磨ききつているはずのグラスをどこからか取り出し、再び磨き始めた。

「今日はマスター、お休み？」

グラスを磨く手が一瞬止まつた。「いえ。先週の金曜日で辞められたんですよ」 そう言ってカクテルグラスを拭き終えると、ショットグラスを磨き始めた。あまりに驚きすぎて、何から訊けばいいのかわからなかつた。

「誰がマスターになつたんだい？」

「お恥ずかしながら、僕が店長をさせていただくことになりました」 差し出された名刺には彼の名前の上に『ショップマネージャー』と打たれていた。店のロゴも変わっていない。さらなる疑問が最初に飲んだビールの泡のようにフツフツと湧いてきた。

「先週の金曜だつたら俺も来ていたし、店長とも話したけど、何も言つてなかつた気がする」

「あの日は古藤さんも来られてましたね。そうですか。三枝さん、何も言わなかつたんですか」

マスターは名刺をくれたこともなかつたし、僕もマスターとしか呼ばなかつたため、本名を聞くのはこれが初めてかも知れない。

マスター、いや三枝氏が雇われ店長だつたこと、若者向けに店の趣向を変えていこうとする上方針を受け入れられなかつたこと、半ばクビのような状態で退職していったこと、何も語らず静かに去つていつたこと、僕が訊きたいことのほとんどを丁寧に説明してくれた。僕は黙つて聞いていた。それ以上、訊くことも浮かばなかつたし、あのマスターが色々身の上話をしているとは思えなかつた。ゆつくり店内を見渡してから「寂しいですね」と独り言のように言った。客が少ないことが、マスターがいなくなつたことに対してものかはわからない。おそらく後者だと思う。とはいへ、自分が店長になつたばかりの時に客が少なかつたらさぞかし悲しいことだらう。彼が抱えている悩みはおそらくそのことだらう。今日がたまたまだといいが。

十時を少し回つた頃、突然、人の声が聞こえてきた。音はぐぐもつていてる。店の外の歩道からだらう。この店はガラス張りになつているが防音ガラスを使つてゐるらしく、緊急車両のサイレン以外の音が聞こえてくることは滅多にない。よほど大きな声を発しているのだろう。その声は、サイレンのドップラー効果のようにだんだん大きくなる。近づいているのではなく扉が開いただけのようだつた。大声の主がこの店に入つてきたのだ。酔つ払いに絡まれるところな事がないため、顔を向けなかつた。僕はうんざりした。目の前の男は僕よりもつとうんざりしながらも笑顔で「いらっしゃいませ」と客を迎えた。僕には客商売は無理だなと改めて思いながらも、今やつてゐる仕事が接客業に分類するならどのカテゴリーに入るか疑問に思つた。

一人の声がするが会話になつていない。一人はわけのわからぬことを息継ぎもなく喋り、もう一人は「お前、飲みすぎだよ」と酔払いに言い、こちには「すいません」と言つ。後の言葉は滝本くんに言つていいようだ。どうやら酔払いと介抱役らしい。僕から二つ隔てたスツールに座つた。携帯電話をいじる様にしてさりげなく右を横目で見た。サラリーマン風の一人が隣り合つて座つた。手前に介抱役が座つているから、目が合わない限り、酔払いに絡まれることはないだろう。僕は酒も好きだし、酒を好む人間にもどうか仲間意識を感じる。しかし、酔払いは大嫌いだ。自分があいう姿になることへの恐れからかもしれない。

スツールに着いた途端、酔払いの方は借りてきた猫のよつに急に大人しくなつた。ここが騒ぐ店じゃないと冷静になつたのかもしない。いや、ここに来る前の店で飲んだ酒のアルコールが歩いたことで血中に溶け出し、ぐつたりとしているのか。どちらにせよ、さつきの店で飲み続けてもらう方が、僕はありがたかつた。もう一杯飲んで帰ろうと、五杯目にギムレットを頼んだ。カウンターの前にはビーフィーターが置かれた。氷で冷やされラベルが見えないほど白くなつてている。

「ベースを変えてもらつてもいいかな?」

「もちろん。ゴーデンにしましようか?」と言つてから、思い出したように「あつ、そういうば三枝さんはタンカレーでしたね。すいません」ビーフィーターを下げようとした。

「いや……やっぱそれでいい」

「だいじょうぶですよ。タンカレーもありますから」

「いや、いいんだ。気にしないでくれ」僕の言い方が引っ掛かつのか怪訝そうな顔を一瞬してからメジヤーカップにビーフィーターを注いだ。

僕がギムレットを初めて飲んだのはこの店だった。その頃はまだ酒の知識もなくのつけからギムレットを頼んだ。酒の飲み方に作法はあっても決まりはないし、特に問題はないのだが。その時、マス

ターは「ギムレットには早すぎる」と笑いながら言った。その言葉が、レイモンド・チャンドラーの小説『長いお別れ』の台詞だと知ったのは、しばらく後だった。ギムレットはその小説に登場したことで有名になつたらしい。ハードボイルドというジャンルらしいが、本を読む習慣がない僕にはよくわからなかつた。でも、マスターがその小説の主人公のような不器用な人間であることは薄々感じていたし、彼がその小説を好きなんだろうとも思った。

ほとんどの、いや僕が足を運んだバーでは例外なく、ギムレットのベースには、ビーフィーターかゴーダンを使う。レシピは、ジンを四分の三、ライムジュースを四分の一。マスターは、ベースにはタンカレーを行い、両者を半分ずつショイクする。いわゆるクラシックスタイルだ。僕はその味が大好きで、他のバーでもレシピを指定して作つてもらうことがよくある。どれもここマスターの味には到底及ばないのだが。いつかまたマスターのクラシックスタイルを飲みたい。今夜はそういう気分ではなかつた。「長いお別れ」であつて欲しくなかつた。

「どこで間違えたのかなあ。あの時、引き止めなかつた俺が間違つていたのか。お前はどう思うんだよ？お前ならどうしてた？なあ？」

物思いに耽つていた僕はすぐに引き戻された。横に座つているのが酔つ払いだつたことを思い出した。耳につくでかい声だ。もちろん僕に言つた言葉ではないが、内心むつとした。もう少し酔ついたら手が出ていたかもしれない。介抱役の男は適当な返事をしてなだめてから、滝本くんにすいませんと謝つた。僕には何も言わなかつた。静かに酒を飲む場所をぶち壊す奴を連れてきたという意味で、こいつも酔つ払いと同罪だと思つた。それを最後に酔つ払いはまた大人しくなつた。

「タクシー呼んでもらえますか？僕、電車の時間があるのでこれ

で失礼させていただきます。タクシーが来たら平井に向かうように運転手に告げてください。平井に行く頃には彼も多少酔いが醒めて家まで行けると思います

信じられない奴だつた。物腰は柔らかそうだが、発した言葉は無礼極まりない。厄介事を他人に押し付けているだけだつた。しかし、滝本くんはにこやかに、わかりましたと答えた。

「なあ」

僕は自分でも驚くような濁つた声が出た。「それはないんじゃないの。酔つた人間を独り残して。連れて来たのは君の責任だ。せめてタクシーが着くまで待つたらどうなんだ」

男は突然見ず知らずの奴に言われたからか、鋭い目つきになつた。一瞬黙つて口をモグモグしてから「ご迷惑おかげします。でも終電がありますので」と頭を下げ、頭を上げるときには僕は視線から外されていた。彼は立派なサラリーマンで、会社でもいつもこつなかもしれない。さつきの厄介事を平氣で押し付ける態度と言い、出世するのはこういう人間なのかもしれないと心の底から思つた。

「それではお願ひします。お釣りはいりません」数枚、千円札を出して、足早に店の外に出た。彼はチャージの存在を知らないのだろうか。足りないことはないにせよ、ことさら言うほど釣りは残らないはずだ。

滝本くんは「ありがとございました」と言い、聞こえてもいないはずの男の背中を見送つた。密商売で成功するのはこういう人間なのだろう。もちろんこつちは皮肉ではない。

五分もしない内にタクシーは到着し、運転手と滝本くんに支えられ酔つ払いは去つて行つた。外は静かで雨はやんでいるようだつた。やつと静寂が訪れた。時計は十一時半を指していた。煙草はもうあと一本になつていた。灰皿には三つの吸殻が仲良く並んでいた。それを見た滝本くんが新しい灰皿に変えようとしたが、あと一本だ

から結構と言つた。

「すいません」

「これだけ飲んだら帰るよ」

「いや、さつきのこと。気を使っていただいて…」

「こつちこそ出しゃばつてすまない。こういう商売つて大変だね」

「そうですね。でも良いことの方がだいぶ多いですよ。色々な人と知り合えますからね」

「ホストになろうとか思わなかつたの？ 君なら十分にやつていけると思うんだけどな」

「昔からよく誘われてました。若い子は酒を出す仕事より、飲む仕事の方がいいみたいですね。でも、全く考えたことはないですね。この仕事が天職というか、これしかないんだなとつくづく感じます。まあ酒は味きき程度にしか飲めませんからね」

滝本くんは僕より一つ上で、今年で二十三になる。僕が通つづつと前からこの店で働いている。確か高校の頃から働いていると話していた。自分の店ではないとはいえ、店長になるのは大変なことだろう。二十そこらでバーを経営する人間はまずいない。岡山は日本で有数のバー激戦区で、ここ中央町は岡山歓楽街の中でも一番の中心地である。

「来週、いつかはわからないんですけど、三枝さん来られると思いますよ。ピアノを持って帰られるみたいなので昼の間だと思いますけど」 グラスを磨きながら、僕の後方に顔を向けた。僕も後ろを振り返つた。黒いクロスを掛けられたアップライトピアノが鍵盤をこつちの方に向けていた。

「あれって私物だつたんだね。それもマスターの「ピアノがあることは知つていたが、誰かが弾く姿は一度も見たことがない。置物ぐらいにしか思わなかつたし、存在自体も忘れるくらいだつた。

「三枝さんはピアノを弾かれるみたいですよ。僕が早く出勤したときは何度か見たことがあります。でも人に見られるのが苦手なのか、

すぐに弾くのを止めてました

「どんな曲を？」

「ピアノのことはあまりよくわからないのですが、あれはジャズでしたね。それは確かです。ちょくちょく耳にしたことがある曲で有名な曲だとは思いますけど」

「一曲、弾いてもいいかな？」

返事を聞く前に立ち上がった。

「ええ、僕のじゃないですが。いいと思いますよ」

何かに引き寄せられるように僕はピアノの前まで歩いていった。

クロスをはぐると、茶色い体が姿を現した。クロスが黒だからか、茶色が際立つて見える。鍵盤の蓋を開くと「KAWAI」と刻印されていた。造りから見てもかなり年代物のようだ。鍵盤はくすんで黄がっている。相当弾き込まれているに違いない。

椅子を調整しようとハンドルを回すと、キイー、と悲鳴のような音を出した。高さを変えられることを拒んでいるのかもしれない。この高さに調整されて以来、ずっと変えられていないのだろう。鍵盤の上に手を構えた。自然とメロディーが溢ってきた。そのまま指が動くようにまかせた。

### ワルツ・フォー・デヴィー

僕が初めて聴いたジャズであり、初めてピアノで弾いた曲だった。

この曲は作曲者のビル＝エヴァンスが、デヴィーという少女のために書いた曲だと聞いたことがある。

ピアノを弾いているというより、弾かされているという感覚に陥つた。まるで誘われるようにして最後まで弾ききつた。少し鍵盤が柔らかいと思ったのは、弾き終えた後だつた。蓋を閉め、カバーを掛け、スツールに戻つた。その間、滝本くんはずつと手を叩いてい

た。

「驚きましたよ」

「僕がピアノを弾くのは意外かな?」 最後の一本に火を点けた。

「ええ。古藤さんがピアノを弾かれるのは正直、意外です。それよりも三枝さんが弾いてた曲と一緒に驚きました」

「マスターもこの曲を?」 僕の目は相當見開いていたのだろう。

僕の反応にさつきよりも驚いたように頷いた。

「以前は一ヶ月に一回も弾いている姿を見かけなかつたんですけど、今月に入つて何度も見掛けましたよ。前は僕が店に出るとすぐに弾くのをやめていましたが、集中してると何か気付かず、弾かれてました。それもさつきの曲を何度も弾いてましたね」

僕はどこか運命的な物を感じながらも「ジャズピアノでは有名な曲だからね」と支離滅裂な返事をした。

いつの間にか火は指先一センチの所まで迫つていて。すぐに揉み消し、シャツを羽織りスツールから降りた。

「そろそろ帰るよ。ギムレットおいしかったよ

「ありがとうございます。また来てくださいね」 少し緊張したものを感じた。店を任されることの不安なのかもしれない。彼なら上手くやつていけるはずだ。

「もちろん。近い内にまた来るよ」

扉を開けると、もう雨は止んでいた。

店を出てから五十メートルも歩かない内に雨がまた降り出した。傘をカウンターに忘れたことを思い出した。取りに戻らうと思ったが、マンションまで五分もかかるためそのまま歩くことにした。日中降っていたのと違い、大した雨ではないようだ。また次に行く時に受け取ればいい。

桃太郎大通りに続く並木通り。一人の男がしゃがみ込んでいるの

が見えた。近づくと、一人でないことに気付いた。背広を着た男が倒れてぐつたりとしている。寝ているといった方が適切かもしない。座っている方は僕に気付いて腰を上げた。薄暗くてはっきり見えないが、かなり若いと思つた。服装からして、巡回通りや岡山駅周辺にたむろしている若者の格好をしていた。髪はきついブリーチを施してあるのか、黄色と通り越してほとんど白く見える。僕はそのまま通り過ぎようと思つたが、何かが引っ掛け立ち止まつたこの一人が友達で、飲み屋で隣り合つて話をしている姿は滑稽だ。きっと他人同士だろう。倒れている方はいびきに近い寝息を立てている。泥酔しているのだろう。少なくともこの流行ヤンキーに殴り倒されたということはなさそうだ。

僕が何も訊いていないのにヤンキーは突然話し始めた。

「あつ、わりいんじやけど、このおっさんにタクシー呼んでやつてくれん？ なんかようわからんのじゃけど、タクシーでゲロつたみてえで、捨てられたらしいわ」 笑いながら言つた。格好からして予想はついていたが言葉遣いがなつていてない。そもそもおかしな話だ。タクシーに“乗車後の乗車拒否”を受けた人間にタクシーを呼ぶ。初等教育を受けていないらしい。

「いや、ええわ。自分で呼べ。携帯を持つてない」 もちろん嘘だ。  
「ホンマによん？ てか、エラそうにゆんじやな？ わし、これが忙しいんよ。まあええわ。死なんじやろうし、このままでしやーねかるー」 学校教育未経験者は桃太郎大踊り方面に向かつて歩き始めた。

「ちょっと待て」

「ああん？ なんなら？」

「その財布は？」

「これ？」 ハジモはベージュの革財布を首の高さまで上げた。 「わしのじやけど」

「じゃあ、その白い長パンの後ろに挿してある財布は？」

ハジモは何かを考え始めた。数秒して名案を思いついたようだ。

これは先輩から預かっどる。さつき行くとこある言うたが、その先輩のことなんよ。てかグチグチ言う前にタクシー呼びに行けや」「その財布、俺に見せてくれん?」確信はなかつた。ただこの口ドモにその財布はかなり不釣合いだつただけだ。違つたら謝ればいい。それだけだ。

「おめえ、ポリみてえなこと言つんじゃな」彼は何がおもしろいのか、大きな声で笑い始めたと思つたら、すぐに表情を変え、「じやあ、先におめえの財布見せてや。中身だけくれりやええけ」

初等教育未経験者は、格闘技未経験者でもあつた。不用意に僕の間合いに入つてきた。僕は、腕を掴もうとするコドモの手を払いのけ、左耳に付いているいくつかのピアスを思いつきり引っ張つた。指にはシルバーの円い細工が一つあつた。一つしかちぎり取れなかつたが、それで十分だつたようだ。コドモは両手で耳を覆い、膝をついて奇声を上げ始めた。ちょうど膝の位置に口があつたが、ジーンズに血が付くのを避けるため、左の拳を口元に叩き込んだ。鈍い感触があつた。すぐには声を上げなかつた。

「勘弁してくれえ。ホンマ悪かつた。財布は返すけ、勘弁してくれえ」手に持つていた方の財布を精一杯持ち上げた。

「まあ酔つている人間の財布を取るのはよくないけど、恐喝はおえんで。何も言わなかつたらこんなことしてねえからな。気をつけるよ。もう行け」返事はなかつたが、両手で左耳を押さえたまま小走りに去つていつた。水たまりで左手についた血を洗つた。

泥酔した男は、何もなかつたかのように横たわつたままだつた。実際、彼は何も見ていないし、もし財布がなくなつていてもどこかに落としたと勘違いしただけかもしれない。とりあえずこのまま放置するわけにもいかないし、さつきのコドモに仲間を呼ばれたら厄介だ。横向きになつている男の肩を揺すると、仰向けになりさつきより大きなびきをたて始めた。急性アルコール中毒からくる鼾ではなさそうだ。急性アル中に陥ると、自律神経が麻痺することで舌が下がり呼吸を妨げるらしい。いびきとは別に寝言のような声もか

すかに出している。雨水でスーツはびしょ濡れになっていた。

よく見ると、さつきバーで酔っ払っていた男だった。友人にも見捨てられ、タクシーにも捨てられ、その上、追い剥ぎに遭おうとしていた彼を、心底不憫に思つた。頬を叩いて声を掛けると弱々しい声を上げた。シャツを脱ぎ、水たまりに浸してから、男の顔に絞り汁を掛けた。一瞬目を開けたが、すぐに閉じた。もう一度水を浴びると今度は目を半開きにして僕の声に反応した。「立てるか？」

といつと、無言で体を起こそうとし始めた。肩を担いで歩くのも無理だと判断した僕は男を背負い、男の右膝の下から回した右手で、左肩から回した男の左手首を掴んだ。驚くほど楽に担ぐことができた。高校の保健の授業で習つたことがこんな所で役立つとは思いもしなかつた。そのまま担いでマンションに向かつた。男は一度も目を覚まさなかつた。

一度も立ち止まることなく無事にマンションにたどり着くことが出来た。インター ホンを鳴らしても中からは反応がなかつた。冴子は今夜も仕事らしい。苦労して鍵を開け、玄関に男を下ろした。ドアに背もたれ座つたまま寝息を立てていた。僕の服も男と同様にどちらになつていた。その場に服を脱ぎ捨て、シャワーを浴びに浴室へ向かつた。

シャワーを浴びた後、リビングでビールを一缶飲んだ。このまま全て忘れて眠りに着きたかつたが、そうもいかない。玄関に脱ぎ散らかした服を取りに行くと、男は目を開けたままさつきの姿勢で座つていた。『キヨトンとする』という言葉が辞書にあるなら、今の彼の状態を表すのもしれない。

焦点が合つているのかわからなかつたが、僕が声を掛けると、「水をください」とやつとまともな言葉を発した。差し出した水を一気に飲み干すと、トイレの場所を訊いてきた。案の定、トイレからは嘔吐する際のなんとも言えない声が響いてきた。それから三十分近く、僕はコップを持ったままトイレと台所を何度も往復し、男は

何度も便器に向かつて奇声を発し続けた。胃液しか出なくなつた頃、男はやつと「もう結構です」と立ち上がつた。着替えを手渡しシャワーを浴びるよつて言つと、男は素直に従つた。

シャワーを浴びた男はさつきより幾分かは顔色が優れていよう見えた。バーで見た時は照明の暗さもあつてかはつきりとは見えなかつたが、歳は二十代半ばだと思つ。髪も短く揃え、爽やかな感じだ。もちろん泥水に浸かる前だが。「人は第一印象で決まる」とはよく言つたもので、バーでの醜態を見なれば、きっと好青年に見えただろう。

リビングに通し、彼にソファーを勧め、僕は食卓テーブルに備え付けの椅子に腰掛けた。

「「」迷惑をおかけしました」 それだけ言つた。ここがどこなのかも、なぜここにいるのかも、目の前にいる男が誰なのかも尋ねなかつた。僕は財布を手渡し、簡単にこれまでの経緯を説明した。ヤンキーに財布を抜かれそうになつたことは言わなかつた。後日、礼を持つてこられるのは面倒だつたからだ。いや、もうここまでしたことは十分礼に値するだつう。そんなことを考えていたが、その心配は必要なかつたかもしれない。「すいません」とだけ言つて、男は財布を握り締めたまま再び俯いた。

ここでも借りてきた猫のだろうか。酒を飲んで語る人間は、酒を飲んでしか話せないことが多い。この男もきっとそういうなんだろう。ただ、一つだけ。

“どこで間違えたのかなあ。あの時、引き止めなかつた俺が間違つていたのかなあ”

酒に強そうでもないこの男があそこまで飲んで喚くにはそれ相応の理由があつたのかといつことが気になつた。目の前の男は語らずして、僕の興味を引いているのは確かなようだ。バーで男が吐いた言葉は、他人に向けて言つたことはないが、自分自身に言つたことは

あつた気がした。あれはもう二年も前か。

「何かお辛い事でもあつたのですか？」

「いえ」

沈黙。顔色は良くなつたが、目には薄黒い色が漂つている。  
「もう終わつたことなんです」

男が抱えている問題について、何通りか予想を立ててみた。女が逃げた。友人を無くした、もしくは亡くした。株取引で売り時を誤つたということも考えられなくはない。普通に考えれば、妥当なのは最初の一いつだらう。

「知り合つたのも何かの縁でしょう。お力になれるかもしませんよ」名刺を差し出した。話をしたがらない男の話に興味が多少あるとも言えるが、飯の種になればそれでいい。時と場合に分けて使えるよう、四種類の肩書きを用意している。内容もまだはつきりしないため、一番無難な名刺を選んだ。

「松下オフィス……副所長……」唇の動きはそつそつしていた。顔を上げて僕の顔を上目使いで一瞥し、再び名刺に目を落とした。一瞬にして男の目に不信感が漂つているのが、ハツキリと見て取れた。目は口ほどに物を言ふ。男が口を開くのを待つた。

「どういう仕事内容なのですか？」この質問には慣れているし、対する応えは肩書きの種類以上に用意してある。

「うちの事務所は松下グループの傘下に治められていて、多岐に渡ります」男の眉が少し上がつた。興味はともかく安心感を得ることには成功したようだ。やはり彼はサラリーマンだ。まだ仕事内容は話していない。一切。

“松下グループ”という言葉に反応しているようだが、商法には「商号自由の法則」がある。彼がどこに松下を想像したかを知るのは容易だが、知つたことではない。そもそもグループ名は自称、公称

問わず、法的には商号にもならない。グループ内の調査に止まらず、各企業の社内調査を請け負っていると説明し、個人向けの調査業務も行っていると追加した。

「そうですか。もつと早くにそちらを知つていれば良かつたかもしれません」

「ど、いと？」

男は咳払いをし、「ビールか何かあればいただけませんか?」というおかしな前置きをした。「飲んで大丈夫ですか?」とは訊き返さなかつた。やつと話してくれるのだろう。やはりこの男は酒がないと話せない人間なのだと改めて思った。自分の分とて一本のビールをテーブルに置いた。彼はビールを一口だけ飲むと、血口紹介が遅れたことを詫び、ゆつくりと話し始めた。

彼の名前は吉本耕一。歳は二十五歳。院卒で去年の春から薬品会社に勤務し、開発部に所属している。

彼には三年前まで付き合っている女性がいた。大学に入つて間もない頃から付き合い始め、一度も別れることなく一緒に卒業を迎えたらしい。その後、彼は院に進学した。彼女の方は、大学在学中から、自分の将来に疑問を抱えたまま卒業し、その年の秋からアメリカのカリфорニアに語学留学をした。初めの数ヶ月は、遠距離恋愛もうまくいっていたらしいが、徐々に連絡は少なくなり、一年が経つ頃にはほとんど連絡を取らなくなつたという。遠距離恋愛によくあるパターンだと僕は思つた。

一方で感心する面も彼にはあつた。彼女の母親は、彼女が中学校の時に離婚し、その数カ月後に交通事故に遭い車椅子の生活を送っていた。それでも女手一つで彼女を育てたという。彼女が留学してからは、彼がちよくちよく実家に様子を見に行き、その母親の面倒を見ていたらしい。しかし、彼女との連絡が少なくなつていくにつれて、実家に足を運ぶ回数も減つていつたという。

そして一ヶ月前、大学時代の友人から彼女が帰国していたことを聞かされる。しかも帰国したのは去年の春だという。ということは、彼女は帰国してから半年以上も経つのに一度も連絡を取らなかつたことになる。

いくつか「そつらしい」と思ったのは、どうも彼には物事を良い方に話そうとする傾向が見受けられるからだ。言い直しや余計な修飾語も多い。まだどこかで通じ合つていると考えているのかもしれない。そこまで話して彼はまた口をつぐんだ。いつの間にか一時を回つていた。彼は初めに飲んでから一口もビールを口にしていなかつた。ずっと手に持つていてせいでだいぶ温くなつてゐるはずだつた。僕はすでに一本目を飲み干そうとしていた。彼が話を再開させるのを静かに待つた。

「佳子……明後日、結婚するんです」

嗚咽し、缶を強く握つた。まだ三百ミリリットルは残つてゐるであらうビールは、ゆっくりと缶から染み出るよに滴り落ちた。それからまたゆっくりと彼は話し始めた。ここからの話は全て彼女と親しい友人から聞いたものだつた。

留学してしばらくしてから彼女はアルバイト先の上司と付き合い始めた。一年ほど付き合つた後、彼女は一年の課程を終え日本に帰ることになった。彼氏の方はアメリカについて欲しいと頼んだらしいが、母親を日本に残しておくわけにもいかず、アメリカにずっと滞在するわけにはいかなかつた。そうした中で、反対にアメリカ人の彼の方が日本に来ることになり、去年の秋から同棲しているという。そしてこの日曜日に結婚式を挙げるらしい。

「そうですか。お察しします」 そう言つたものの遠距離恋愛をしたことも、まだ心にある女性が結婚するという出来事に遭遇したことがない僕にはピンとは来なかつた。彼も社交辞令と受け取つたか

もしれない。そんなことよりも、この一時間近く、いや、店を出たところから、一時間も付き合わされた心労が一気に押し掛ってきた。

「それで、諦めは、もうついたのですか？」

吉本はゆっくりと首を横に振つてから「わかりません」と答えた。  
「彼女と話したらどうです？ 一度も話してないんでしょ？」

「そうですね。もう最後に話したのは一年以上も前です」昔を振り返るよう言い、「でも、もう……僕はどうすれば……」と、呟いた。

僕に問うたために言つたのかはわからないうが、答えることにした。

「一つしかないでしょ」「はつきりと前置きをおいた。どちらかに限定して選択させれば、選んだ本人はそれしか方法がないように思い込む。交渉術ではよく用いられるもので、こういう状況にはつってつけだ。依頼者にならないのなら、できるだけ早く話を切り上げたかった。

「このまま諦めて一生、彼女の前には現れない。もう一つは結婚する前に、話をしてもう一度あなたのことを考えてもらひ

セッターに火を付けた。空気の流れがないのか煙は僕らの間にふわりと浮かんだ。

「結婚、厳密には婚姻届の受理ですが。国際結婚の場合は国籍や永住権の関係で法務省も絡んできますから、まだ時間は十分にあるはずです」

この言葉は、彼に期待を持たせるために言つたわけでも、そうするべきだと示唆したのではない。もちろん、一番平穏に終わるのは前者だし、彼にとつてもその方がいいに決まっている。前者を選ばせようと思つていたが、余計な一言が彼に望みを与えてしまったようだ。未練ゆえ、なのかも知れない。

「具体的にいふと？」

思つてもいない展開だった。「そうですねえ」僕はゆっくりと煙草の煙を吸つた。肺から紫煙が全て排煙されるまでの数秒に、脳

をフルに働かせたが、当たり前すぎる言葉しか思い浮かばなかつた。

「結婚式を挙げてしまえば、やはり厳しいでしょうね。明日しかな

いでしょ」

「厳密には今日だつた。

「そうですね。今日しかチャンスはないですね」彼はゆっくりと顔を上げた。僕と目が合つた。ついさっきまで弱々しかつた彼の目には、新たな強い光が宿つていた。

僕はこの男の意志を尊重し、手助けをする気になつた。どう転ぶにせよ、彼の納得のいく形にしてやろうと思つて始めた。

この男は純粹で、きっと人から好かれる人間なのだろう、そう思つ。しかし、世の中でうまくやつしていくのは先に電車で帰つた男のような人間なのだろう、改めて思つた。不器用な人間は嫌いではない。

僕らは段取りを始めた。僕が日常的に行つてゐる探偵業務の範疇を超えてゐるが、やるべきことはないわけではない。僕は話し合いの仲介と代理人を務め、彼には友人から結婚式の段取りを出来るだけ詳しく聞き出してもらつことにした。本来ならば、調査を請け負うこぢら側が調べなければならないのだろうが、時間がない。今日一日分の日当、三万円を受け取り、事務所名義で領収証を切つた。

本来は諸経費を含めた手付金に値するものだが、成功報酬のことは一切口にしなかつた。結婚式を延期もしくは中止にすれば成功なのか、彼女とよりを戻せば成功なのか、彼が納得すれば成功なのか、よくわからなかつたからだ。

一緒にマンションを出た。タクシーが集まる中央町の中筋まで送ることにした。午前三時を回つていた。雨はもうやんでいた。ほとんどの店は閉店時間を過ぎてゐるが、仕事を終えた水商売従事者たちが道端で話をしていた。タクシーに乗り込んだ吉本は「よろしくお願ひします」と言つた。

岡山の歓楽街は眠る。その様子を見ながら、ゆっくりと、来た道

を歩いた。

マンションの前に着いたとき、同時にタクシーが止まった。そのままエレベーターに向かおうとすると、急に後ろから名前を呼ばれた。冴子だった。パンツにパーカー、仕事を終えた冴子は普段着に着替えていた。そのままパジャマにしてもおかしくはない。

「お姫様、おかえりなさいませ」

「え？ 何が？」

料金をポーチにしまい終えたタクシーはまた次の客を求めて走り出した。

「ワンメーターもいかない距離なのに」

「ああ、タクシーね。だつてまだ雨やんでないよ。ほら」掌を上に向けた。並んで部屋に向かった。

「立派な御身分で」

「別にいいじゃん。仕事の後だし。それより何してたの。わたしの帰りを待つてたとか？ そんなわけないか」

「うん、ない」

「中央町行つてたの？」

「そう。ツレを送つて行つたところ」すぐには訂正しようと思つたが、遅かった。「中央町で飲んで帰つてきたところ」と、言つべきだつた。

「もしかして黙つて人を部屋に入れたの？」

一緒に住んでいるが、僕は家賃を払つていない。人を部屋に上げる時は、事前に言つておかなければならぬという決まりがあった。緊急だったとはいえ、約束を破つたことに変わりはない。僕は素直に謝つた。

「オンナ？」

「気になる？」冗談のつもりで言つたが、度が過ぎたようだ。

「そんなわけないじゃん。てか何度も言つけど、正は居候であつて私と同棲してゐるわけじゃないんよ。家賃どるよ 最後の言葉は僕

を黙らせるのに十分だつた。

部屋の前に着き、鍵を差し込んだ。玄関を泥だらけにしたままだつたことを急に思い出した。

「ちょっと待つて」 そう言つて冴子の視界を隠すように玄関に入り、中から鍵を閉めた。初めて彼女を家に呼んだ時にすることなのかもしない。僕らはなんだかんだで一年半も一緒に住んでいる。「ちょっとお」と聞こえた気がしたが、後の言葉は扉の閉まる音に搔き消された。すぐに洗面所に行き、雑巾を水で濡らした。玄関に行くと、すでに扉は開いていた。当然だが冴子は鍵を持っている。驚いた顔をしていたが、「わたし、もう寝るから、ちゃんときれいにしといてよ」と、一言だけ言つて自分の部屋に入つていった。怒られるより怖かつた。

隅々まできれいに拭いてから、床に就いた。

十時に目が覚めた。無理やり覚ましたと言つた方が適切かもしれない。すぐに動けるように身支度を始めた。十一時きつかしに依頼人から電話が掛かってきた。

「おはようございます。昨夜はありがとうございました」

「どうでした？ 誰から訊けましたか？」 彼が帰つた後のことはもちろん話さず、すぐに切り出した。

「いえ、まだなんです」

「そうですか」

「大学の同級生に電話をしたのですが、もう関わらない方が僕にとつてもいいと言われました」

「そうですか」 予想していたことだつた。

「もう一人いるので恥を承知で訊いてみます」

「恥？」 わざと大きな声で訊き返した。「いいですか。あなたがこれからやろうとしていることは、彼女だけでなく多くの人間を巻き込むことなんです。そのくらいの覚悟がないなら、素直にその友

達の言葉に従つたほうがいい」

長い沈黙があつた。友人に忠告された上に、唯一味方と思つてゐる僕からも叱咤されて、がつかりしているのかも知れない。

「そうですね。すいません。また連絡します」

彼女の実家の住所と電話番号を訊いてから電話を切つた。すぐにその番号に掛けた

十回以上鳴つてから、相手が出た。「はい。園田です」男の声だつた。彼女の結婚相手かもしれないと一瞬焦つたが、声の主は明らかに日本人で歳は四十歳前後だろうか、渋く落ち着きを払つた声だつた。彼氏ではなさそうだ。どこかで聞いたことのある声のような気がしたが、よくわからなかつた。

「佳子さんはご在宅でしようか?」

「いえ、今はおりません。どちら様でしようか?」

「大学の友人で田中と申します。いつ頃、お帰りになられますか?」

「えー、ちょっとお待ちください」電話の向こうから女の声で「誰から?」という声がした。彼女がちょうど帰つてきたのかと思つたが、また予想は裏切られた。

「お電話代わりました。佳子のお友達ですか?」さつきの男性と同じ歳くらいの声だつた。母親だろう。本人が出るより好都合だつた。母親を取り込み、彼女から娘に話をさせる方が上手くいくかも知れない。母親の情に訴える口実もある。

「はい。そうです」

「じめんなさいね。ちょっと今、出かけてるのよ

「式の準備か何かですか?」

「そうなのよ。彼と一緒に出かけてるの」

「いつ頃、お帰りになられますか?」

「じめんなさいねえ。それが、全くわからないのよ。何か伝えておきましょうか?」

「明日の式の案内を無くしてしまつたもので。それを訊ひつと思つて電話させていただきました」

「あら、そうなの。ええっと、大元にある教会なんだけど、確か福音トリック教会って言つてたわ。時間は三時からよ。帰ってきたら連絡するよ」つに言つておきましょうか？」

「助かります。あと、伝言よろしいですか？」

「ええ、もちろん」

僕は咳払いをしてから落ち着いた声でゆっくり話した。

「あのう、吉本耕一くんのことはご存知ですよね？」

短い沈黙があつた。どう答えばいいのか戸惑つているのかもしないし、僕が何を言い出すのか次の言葉を待つてているようにも思えた。

「ええ。娘と以前、付き合つていた子ですよね？」

「そうです。彼からの伝言を伝えて欲しいのです」僕の言葉には答えず、代わりに「あなたは？」という質問が返ってきた。

「彼の友人です」さつき僕がついた嘘を問いただしてくるのかと思つたがそうではなかつた。

「それで伝言というのは、どんなこと？」

「佳子さんと今日中に会つてお話をしたい、それだけです」

今度は長い沈黙だつた。もしかしたら娘からは、別れたと聞かされていいるのかもしれない、いやそうに違ひない。状況がうまく掴めていないうふに思える。

「ごめんなさい。それはできないわ」

「いえ、無理なお願いだということは重々承知しています」吉本がこの電話の主に世話をしていたといつ、「恩」をネタに話を持つていこうと思つていてるが、どの程度のものかはわからないし、こちらからカードを切るには早すぎる。

「彼が納得いかないままでは、娘さん達の結婚を受け入れられないと思うんです。話し合いの機会を持つことが娘さんのためにもなりますし、強いては彼のためになると思います」いかにもそれらしく話した。そろそろカードを切り出してもいい頃だらう。

「そもそも今回の事は僕が切り出したことなのです」あくまで

吉本青年が僕に頼んだのではなく、僕が彼の心中を察して自らの配慮で勝手に電話をしている、という印象を与えるように心掛けた。

「吉本くんは、佳子さんだけではなく、お母さんにもなるべく迷惑は掛けたくないとも言つていました。佳子さんが渡米されてからは母親のように慕つていて、とてもお世話になつていても話していました」「一方的に話した。もちろんどれも嘘ではない。相手の言葉を待つた。

「そんな……お世話になつたのは、わたしの方です」 鼻を啜<sup>スス</sup>る音が聞こえた。当時のこと思い出しているのかも知れない。僕は罪悪感は全く感じなかつた。依頼人の利益のためならどんなことも言う。それが誇張であるうつと事実でなかろうと。世の中で最も尊敬される職業に入る弁護士でさえ平氣でやつてのける。

「耕一くんには佳子がいない間もよく来てもらつていたわ。本当に優しい子で、足が不自由な私の様子をよく見に来てくれていたの。私も息子のように可愛がつていたわ」 一呼吸おいて、「でも、それと今回のことは別。私自身、まだ籍は入れてないんだけど、こんな私と一緒にしてくれる人が現れたの。あつ、さつき電話に出たのが主人なんだけどね。だから、ずっと父親がいない家庭で苦労させてきたあの子には幸せになつて欲しいの。女としての幸せを手に入れて欲しいと思うの」と言い放つた。人としての幸せはあるにしても、「女としての幸せ」がどういうものかいささか疑問に思つし、この御時世に結婚が幸せに繋がると考えている若者は少ないだろう。しかし、反論する余地はなかつた。僕が男だからというわけではない。

強固な決意を感じた。これ以上、僕が何を言つても説得することは不可能だろう。トーンを落とし、お祝いの言葉と迷惑を掛けたことの謝辞を言い、電話を切つた。

冷蔵庫からコカコーラを出し、コップに注いだ。さて、どうした

ものか。このままあきらめるわけにはいかない。残る方法はなくはないが、あまり穩便なものとは言えない。煙草を一本吸つてから依頼人に電話を掛けた。

「どうでしたか？　話をする段取りはつきましたか？」　電話に出た彼からの第一声がこうだった。焦りが感じられる。無理もない。「佳子さんの母親が出て話をしたのですが、駄目でした」「そうですか」　一声目とは打つて変わって、落胆ぶりが見て取れるような声だった。

「どうでした？」

「無理でした」　また一呼吸おいてからゆっくりと「もう諦めた方がいいですかね？」と言つた。

「それは僕が判断することではありません」

「他に方法があるつていうんですか？」　声を荒げた。この無能な請負人に怒っているのかもしれない。僕は冷静に「なくはないです」と答えた。

「どんな方法ですか？」

「方法は二つありますが、一つは無理やりでも今日中に直接会つて話することです」

「もう一つは？」

「明日、式當田に話をすることです」

「え？　それはどう考へても無理でしょう」

「そうでしょうか？　今日、会えばきっとあしらわれるだけでしょう。それに時間もわからないし会えるかもわかりません。それよりも確実な機会が訪れる明日にする方が」「どうということですか？」

僕は順序立てて説明することにした。

「“大元福音カトリック教会”という所は、似非信仰者の日本人が行つ結婚式会場と違い、きちんとした聖教者が式を行うことが多いのです。彼の方がアメリカ人であることを考えれば、正式な形で式

を行う可能性が高いと思われます」

「それがどう関係するのですか？」電話の向こうであつけらかんとした顔をしている吉本の顔が、目に浮かぶ。

「米国では、両者と司祭がウエディングライセンスに署名するまで夫婦と認められないと法律で決められています。もちろん、日本では法的拘束力はありません。しかし、正式な形を採るのであれば、彼にとつても司祭にとつても大きな意味はあります。彼の家族も出席しているでしょう。ウエディングライセンスは式の終了を待つてから行われます」

「いえ、だからそれと結婚を止める機会があることにどう関係するんですか？」僕の息継ぎを狙うかのように間髪入れず疑問を投げかけてきた。

「最後まで黙つて聞いてください。いいですか？」

「はあ」

「ウエディングライセンスが発行される前に止めればいいのです。チャンスは三回ありますが実質的には一回です。まず式前に司祭に面会を持ちかけることです。これが一番平穏にできる方法です。司祭はそのような場合の対処についてはわきまえていると思います。もう一つは式中に申し出る場合です」テーブルにおいていたコーラを飲んだ。さつきからずつと話している背せいか喉が渇いている。「式中つていうのは……まさかと思いますが」しびれを切らした吉本がまた遮るように疑問をぶつけてきた。独り言のようでもあった。

彼の頭には、教会の窓を叩きながら「エレイン！」と叫ぶダスティン・ホフマンが浮かんだのかもしれないし、バルコニーから財前直美が扮する幼馴染に愛を叫ぶ織田裕二が浮かんだのかもしれない。

「映画にあるような劇的なことをする必要はありません。司祭が『二人の婚姻を結んではいけない理由をご存知の方はいらっしゃいますか？』と言つたときに、拳手をして立ち上がればいいのです。あ

とは別室なり、その場なり、司祭が上手くやつてくれると思います  
「それでつまくいくのですか？」

「それはわかりません。佳子さんは彼女なりの考えもありますし、最悪、一人で式場を後にしなければならなくなる可能性もあります。可能性といつても、はつきり申し上げてゼロに近いと思います。このまま手をこまねいて見てているだけならゼロです。そうするなら一生、沈黙を通すべきです」

「わかりました。あのー、少し時間をいただけますか？」

「そうですね。式まであまり時間はありませんが、結論が出たら連絡をください」

細かい点をもう少し詳しく説明してから電話を切った。彼から電話が掛かってくることはないかと思ったが、手付け金に見合った仕事をこなすべく用意を始めた。あの母親はハツキリと教会名を言わなかつたため、きちんと調べなければならない。大元あたりにはたくさん教会があり、紛らわしい名前も多くある。もし明日、依頼人が行動に移すとなる場合も想定し、下見に行くことにした。遅すぎる朝食を取り、出かける前に見た時計は一時過ぎを指していた。冴子はまだ夢の中のようだ。

外に出ると昨日の雨が嘘だつたかのように晴れていた。朝から日が照っていたのか、水たまりもほとんど消えていた。マンションには僕が停める駐車スペースはなく、いつもマンションから百メートルしか離れていないビリヤード店に月極めで置かせてもらっている。店は今年で七十歳になる老婆が経営している。駐車場にいくと、店舗兼自宅の入り口にあるガラス戸のカーテンは開けられていた。中を覗くと人気はなくまだ店は開いていないようだった。買い出しに行っているのかもしない。

パルサー・G T-i Rのセルを回した。この車に買い換える前も同じ車種・同色だった。ただ今の方が、エンジンは比較的、新しいに乗せてあるためパワーがある。もう十数年も前に廃版にな

つている車にも関わらず現代のスポーツカーに負けない。燃費はリッターあたりハイオク五キロメートル。走るために魅了されている。日産がこのような車を発売することは今後ないだろう。バイオガソリンが発売され、燃料電池が開発されている、このエコの時代には二十世紀の負の遺物なのかもしれない。

駐車場を岡山駅方面に出て、県庁筋に入った。大元へは十分とかからない。大供交差点に入る前に伊東堂を通りかかった。ちょうど一年半前、こここの駐車場で大きな爆破事件があつた。成人式を三日後に控えた夜だった。

大供交差点は県内で一番、交通量、分岐路ともに一番多い。右前方に入り、二つ目の信号を右折した。“大元福音カトリック教会”はすぐに見つかった。路上に駐車して敷地に入った。この辺りは教会が多いが、ここは際立つて大きい。建物の左右両側に回つて出入り口を確認した。

子供一人では開けられないくらいの大きな扉はキーという音を立てただけで思ったより軽く開いた。光を待っていたかのように薄暗かつた正面の通路には、僕の影を残して光が伸びていった。ここがバージンロードなのだろう。明日、ここで大騒動が起きる可能性があり、それを教唆する人間がここにいるとは誰も思わないに違いない。中は不気味なほど静かだつた。静寂という言葉はこういう状態を指すのだろう。十を超える長椅子は正面通路を挟んで礼拝台まできれいに平行をなして置かれていた。扉を閉めると、蠟燭が左右の壁に置かれていることに気が付いた。正面の地上三メートルの位置には、巨大なステンドグラスがあり、天窓から差し込む光を眩しくないほどに反射していた。グラスにはイエス・キリストらしき人間が十字架に張り付けられた状態でうな垂れているのが写し出されていた。ずっと通りい続ければ、一年も経たずとも立派なキリスト教徒になつているような気さえする場所だ。

左の列の一番手前の長椅子に腰掛けた。明日の結婚式がここで行

われるかを確かめなければならない。人が入ってくるまで待つことにした。キリスト教の教えにある「隣人愛」というものを改めて考へてみようと思ったが、隣に住んでいる住人の後姿しか知らない僕が人類全般に愛をもつて接することは無理なのだろうと改めて思った。聖書は新旧どちらも一行も目を通したことさえない。

十分くらい経った頃に礼拝台に続く階段の左側の扉から人が出てきた。白装束に黒に近い藍色の頭巾らしきものを被り、顔だけを出した女性だった。女性とわかつたのは映画でこのような衣裳を着ている信者を見ただけで、実際これだけを見て年齢どころか男女を判断するのは難しそうだ。その映画では陽気なシスターがゴスペルを子供たちと熱唱していた。目の前に現れた女性はそれとは全く異なる感じで、うつむき加減ではあるが優しい微笑みを浮かべながら挨拶をしただけで僕の横を通り過ぎ外に出て行つた。向こうから話しかけられるだろうと考えていた僕はきつかけを失つてしまつた。どこの寺でも挨拶をしたらいきなり世間話に入る坊さんがほとんどだつたため、同じように考えていたのかもしれない。よくよく考えれば、結婚式以外に利用目的のない教会風の建物にしか入つたことがない。後を追つてすぐに僕も外に出た。

「ちょっとお伺いしたいのですが

「はい、結構ですよ。何でしようか？」

「明日、ここで行われる式についてお伺いしたいのですが

「サリスさんと園田さんの結婚式でしょうか？」

「そうです」これを確かめるだけで他に訊くことはなかつた。旦那の名字がサリスというのは初めて知つた。牧師の名前はロス・ニーマンというらしいが、依頼遂行には関係なさそうなことだつた。時間と牧師の名前を訊いただけで少し世間話をしてその場を後にして。帰りの車の中で、侵入経路と彼女を連れて外に出るための“逃走経路”をシユミレートした。映画のようにバルコニーから叫ぶのはよろしくない。退路を考えるならバージンロードがいいように思える。上手く連れ出せば後は僕が用意した車に一人を乗せる。こ

れは最終手段であつて一番は牧師に掛け合うことだ。無論、依頼人からの電話によつては必要がなくなるかも知れないが、請負人として最善を尽くさねばならないことは言つまでもない。“結婚しました”と書かれた車を乗つ取るという現実的な妄想が頭を

どこにも寄らず真っ直ぐマンションに帰つた。冴子の部屋から音が漏れている。夜型の仕事といえど、もう起きているのだろう。二時になろうとしていた。冷蔵庫からアイスを取り出し、テレビをつけると横山秀夫の『陰の季節』のドラマが始まろうとしていた。携帯電話を見るが、吉本からの連絡は入つていない。考えさせてくれ、と言つていたが、もしかしたら掛かつて来さえしないかもしない。話に没頭し、上川達也が真犯人の目星を付けた頃、突然電話が鳴り始めた。電話はいつも突然鳴る。

「どうするか決められましたか？」

「はい。明日、説得しようと思います」

「そうですか。わかりました。具体的な計画を話し合わないといけないので、これから伺つてもいいですか？」

「はい。大丈夫です。僕の家はわかりにくいので、僕がそちらに伺いましょうか？」

「それは助かります。近くに着いたら連絡ください」　ドラマの結末が観られるからというのもある。

「では四時半にそちらに行きます」

「わかりました。お待ちします」

電話を切りまたテレビに戻つた。ドラマは小説とほとんど同じようを作られていたため、新鮮味はあまり感じられなかつた。テレビを消し、今日調べていたことも含め、話さなければならぬことを頭の中で整理し始めた。注意点、法的なことも含め思つたよりたくさんある。

四時半前に再度電話がかかってきた。マンションの下に停車してそこで待つように指示した。マンションに入れる時は事前に言

うように、と冴子に怒られたばかりだったため、近くの喫茶店で話すことにした。財布と煙草だけ持つてマンションの下に向かった。

煙草を一本吸い終えると同時に曲がり角から、白のホンダ・フィットがこちに向かってきた。ハザードを焼き、依頼人が降りてきた。

白いポロシャツにジーパン。スーツを着ていないからか、かなり若く見える。大学生を言つても通用するのではないだろうか。

「お世話になります。車はどこに駐車すればいいですか？」

「すぐそこ喫茶店に入ろうと思います。ここに路駐させておいても問題ないですよ」 そう言つて『タマキ』と書かれた看板を指差した。このあたりは通りが入り組んでいることもあってパトカーはまず入つてこない。窓際に座れば、車の様子を見ることができる。「いえ、だいじょうぶです。どこかコインパーキングがあれば教えてください」 この男にとつて路駐は御法度なのだろう。点数がなさそうには見えない。法定速度でさえ常に守つてている気がしないでもない。コインパーキングの場所を指示し、戻つてきてから一緒に店に入った。ドアに取り付けられた鈴が鈍い金属音を立てた。

店には誰もいなかつた。店員さえもいなかつた。いつものことだ。「すいません」 徐々に音量を大きくし、三回目にカウンター奥から物音がした。出てきたのは娘の方だった。もう夏休みが近いからか茶髪を通り越し金髪になつていて。化粧も前よりも濃くなつている気がしないでもない。

「ああ、正じやが。久しぶりー」 通い始めの頃はお兄さんだったのにいつの頃からか呼び捨てになつていて。この子の名前はメグだつた気がする。

「まだ、いい？」

「いいよ。メグ、忙しいから中おつてええかな？ もう少ししたらおかんが買い物から帰つてくると思つけ」

「アイスコーヒー二つよろしく」

「わかったー」 間抜けな声だが、面倒だというのが顔に書いている。きっとテレビを見ながら同じようなツレとメールでもしていた

のだろう。

この店は昼から夕方まで営業しているが、閉まる時間はかなり適当だ。三時に閉まっていることもある。一応、月曜が休みになつているが、おばさんの都合で週休一日になつたり三日になつたりする。この“今時のギャル”を店番に使つてること自体、やる気のなさが伺える。安い豆をいつも選んでいるのか、味がよく変わる。他の客を見たことはほとんどない。僕にとっては好都合だ。依頼内容を聞かれる心配がまづない。客をよくここに連れてくる。

「あそこに座りましょう」

指をさした。

「え、ええ」面倒そうにエプロンを着ける娘を不思議な目で見て

いた。

一番奥のボックス席に座つた。客がいない分、余計店の広さが際立つ。広い店だというのは確かなのだが。依頼人は店キヨロキヨロと店内を見渡している。

「もう一度、お訊きしますが。明日、教会に説得に行きますね？」

「はい」力強い声だった。何かをかみ締めるようにも感じられた。

「わかりました」

昼に調べた教会の様子と造り、牧師に話しかけるタイミング、彼女を説得する際の注意点、成功した場合の経路などを昨晩話したことを合わせて順序立て丁寧に説明した。依頼人はメモを取りながら真剣に僕の話に聞き入った。

「おまたせー」待ち合わせに遅刻したような感じでメグがコーヒーを持ってきた。ありがとう、と言つたが「ごゆっくり」とは言わなかつた。ゆっくり居座られたくないと思っているのかもしれない。煮沸したお湯を一気に氷で冷やそうと思つたのか、氷は急激に体積を減らしていった。まだ温いはずだ。まだ口につけないでおこうと思つた。心配そうに横目のまま首を少し回した。当のメグはすでにエプロンの紐を外し始めていた。

「これ少し、酸っぱいですね」一口飲んだ依頼人が言つた。思わず口が滑つたといった感じだった。メグに聞こえてないか

「ええ、ここのはハワイ産の豆を使つてますからね。酸味がありますよ」もちろん嘘だつた。客が少ないため古い豆を使つているのだろう。そしてそれを飲んだ客は不味いと思つ。悪循環といつやつだ。客が少ないのは好都合だが潰れてもらつては困る。

「事後の注意点ですが」 煙草の火を消した。

「はい」

「これは成功した場合ですが、損害賠償が発生します」

「それは覚悟しています」

「式の費用を含め、あらゆる費用を肩代わりしなければなりません。披露宴がわかりませんが、あれば当然にかかりますし、二次会で貸し切つた店の費用もそうでしょう。新婚旅行に行くのならその旅費も払う必要があります。成功した場合は園田さんもいくらか負担してくれると思いますが、あとは話し合いです」

「いえ、大丈夫です。全て僕が払います」

「わかりました。あと損害賠償の他に、慰謝料も発生すると思われます」

「えつ？ 結婚する前の恋愛の段階では別れても発生しないのではないですか？」 何かの本で調べたのかもしないが、深くは知らないようだ。さつきの自信に溢れた顔つきに影が射し込んだ。

「民法上、恋人の間柄では発生しません。しかし、現在、同棲していることや婚約をしているという個別的な事情を鑑みれば、発生するでしょう。これについては、額はわかりません。相手次第です。もしかすると言い値になるかもしぬれません。示談で決着が付かなければ、裁判に委ねられる事になるでしょう」

「わかりました。覚悟しておきます。他にはありますか？」 覚悟したという割りにさつきより弱気になつてているように見えなくもない。

「いえ、これだけだと思います。これだけだといつても式の規模も分かりませんし、全部合わせるとファイット三台でも足りないかもし

れません」

「わかりました」 頷きながらゆつくりと返事をした。

煙草を取り出した。白い煙がゆらゆらと揺れながら上にのぼつていぐ。まだ一口も飲んでいないコーヒーを啜つた。氷を入れすぎたらしい、冷えてはいるが明らかに薄い。そして酸っぱい。

「一日にタバコはどれくらい吸われるのですか？」

「最近はだいぶ減らしましたよ。一箱いかないくらいですかね」

「そりなんですか。それで減らしているつていうのは驚きです。そのタバコの二口チンつきついんですよね？」 本当に驚いた、というような顔をしている。正確にはタバコの重さを決めるのは二口チンではなくタールだ。一度そのタール量に慣れれば、軽いものは軽いと感じるが、重いのはわからなくなる。

「煙草は吸わないんですか？」

「ええ、全く。一度もありません」 確かに健康に気をつけている感じがする。煙草は吸わないが酒は好きなのかも知れない。訊いてみることにした。

「お酒は好きなんですか？」

「昨夜は… みつともない姿を見せてしまいました。御迷惑をおかけしてすいません」

「いえいえ、気になさらないでください」

「酒はほとんど飲めないんですよ。昨日はヤケ酒というか…」

一緒にバーに来ていた男のことが気になつたが、僕がバーにいたことは知らないだらうから自分から訊くことはやめておくことにした。「ドモに財布を盗られそうになつたことも知らないはずだ。通りすがりの男が親切心を働かせて一晩面倒見たくらいにしか思つていないだらう。

「一人で飲んでいたのですか？」

「同僚と飲んでいました。居酒屋で飲んでいたことは覚えているのですが、どうやらそこで酔い潰れてバーに行つたらしいです。記憶にないんですよ」 苦笑いを浮かべた。

「その同僚の方はどうされたのですか？ 僕が道端で見かけた時はお一人でしたよ」

「詳しくは聞いてないのでわからのですが、タクシーに乗せてから帰ったみたいです。苦労したと怒られました」 また苦笑いを浮かべた。それは僕の台詞だろう。奴はタクシーに乗せるどころか、タクシーを“頼むように頼んだ”だけだ。店で揉めそうになつた男が自分の置いていった同僚を助けたとは夢にも思わなかつただろう。僕も全く予想していなかつた。こんな事になることも勿論考えていなかつた。

「お金のことですが…。明日の分も今お支払しましょうか？」

「いえ、結構です。うまくいつたら成功報酬として今日と同じ料金を頂きます」 今日した事といえば電話一本と教会に足を運んだだけだ。前者は失敗ともいえる。そして明日は、車の手配だけだ。事務所名義で領収書を書くわけにはいかない。まずバレることはないが、第二種免許を持つていない人間が白タクまがいのことをするのは宜しくない。

話を終え、すぐに店を出た。メグを呼ぶのが面倒だったのでカウンター横のレジの前に千円札を置いていった。明日の時間を確認し、店の前で別れた。マンションに戻ろうと歩いていると髪に何かが当たつた。見上げると、灰色をした雲が空を覆つっていた。今日は休日だが、梅雨前線は休みではないらしい。

部屋に戻るとリビングで冴子が鏡を見ていた。

「おかえり」

「もう仕事？ 早いね」

「うん。そう。今日は出勤前にお客と会つて食事することになつてるので」 同伴出勤日らしい。客は出勤前にキャストと店外で食事などをしてから一緒にキャバレーに入る。店外でも勘定をするのは客だ。そして、店でも最前線の娘の売り上げ向上に協力する。

「そつか。仕事がんばれよ」

「うん、今日は結構いいお客さんなの」

「ほう。稼ぎ日つてことか」

「だね。車買つてもうれるかもしけないの。正の車よりもつとい

やつだと思うよ」

「俺の車よりいい車なんて探せばいくらでも見つかるだろ」

「確かにね。でも何をもつていい車かつていうのは人それぞれだも

んね」 僕が次に言おうとしていた台詞を言われた。

「私はあの車好きよ。オーナーに愛されてる車は全部いい車だよね。

じゃあ行つてくるね」

「気をつけてな」 そうじつてから玄関から出ようとする冴子を呼び止めた。「今度ドライブ行こうか?」

「そういえば、しばらぐ一人で遊んでないね。うん、行こう行こう。休み確認しどくね」

台所でコーヒーを作り自室に入つた。セッターに火をつけた。コーヒーをそそる。さつき“ハワイ産”豆のコーヒーを飲んだせいで、いつもより美味く感じる。インスタントに負けるコーヒーを出し続けるあの店はもう長くないかもしれない。そんな懸念が頭に浮かんだ。

今日やることはあと一つだけだ。明日の車を手配しておかなければならぬ。ホフマンとHレインを乗せるにはパルサーはお粗末過ぎる。状況によつては、ドレスを着た花嫁を乗せることになるかもしない。松下に頼んでみようか。電話を掛けるとすぐに出た。

「何かあつたか?」 一聲目がこれだつた。仕事の話と思つているのかもしれない。一応、上司であるが、歳も一緒に中学校も同じだつた。僕が敬語を使うことはない。

「仕事の話じやなくて個人的な頼みがあるんだが…」

「どんなん?」

「車を貸してくれないか?」

「アストロ?」 松下は一台車を持つていて、一台はシボレー・アストロに乗つてゐる。もう一台はマジックスタで、業務用に使つてい

るが名義は松下の個人名義になっている。事務所を通さないシゴトだから、黙つたまま借りるのは気が引ける。

「そ、あのワゴン」

「ええけど、何に使うん？ オンナか？」 電話の向こうでそう言いながら、小指を立てている様子が浮かんだ。

「まあそんなところだな」

「結構、人乗せるんか？ 合コン？」 興味津々で訊いてくる。

「まあそんなところだな」

「メンツは？ 男の空きはねえん？」

「悪いが、ないんだ。四対四で海に行く」

「ああ、じゃけえアストロか。ぼっけえ羨ましいが」「貸してくれる？」

「しゃーねーな。じゃけど、一番後ろのシートは荷物で埋まつて八人は乗せれんよ」

「俺が片付けて掃除するわ」

「まあそれならいいけど……」 まだ不満があるのかもしれない。そんな口調だ。

「ガソリンは満タンで返してな」

「もちろん」

「もう空に近いけどな」 笑いながら言った。あの車のタンクは八リットルは入るはずだった。今月からガソリン代が高騰していることを考えれば一萬は軽く超えるだろう。とは言え、業者にレンタルすることを考えれば安いものだ。今週の仕事を確認して電話を切つた。

時計を見ると、七時前だった。どこかに晩飯を食いに行つてもいいと思つたが、雨が降つていて、外に出るのは面倒だった。冷蔵庫の食材を使って簡単な夕食をとつた。自室に戻り、『長いお別れ』を探そうとしたが、本棚のないこの部屋で文庫本を見つけ出すのは不可能なようだ。あきらめて小島武夫の『絶対に負けない麻雀』をまた最初から読み直した。先切りや引っ掛けリーチなどの小手先の

技術は一通り使えるが、小島九段の言う『ツモのリズムに沿った手作り』というのは未だに身に付いていない。じっくり一通り読み終えると十一時近くなつていた。風呂上りのビールを飲み床に就いた。ちょうど一年半前、結果的にではあるが、僕は真理子でなく冴子を選んだ。男と女の関係は最も不可解なものだと思う。何をもつて幸せというかは千差万別。吉本がやろうとしていることが幸せになる方法なのはわからぬ。一度、離れたものを捉まえるのは容易なことではない。僕はそうしなかつた。正しかつたかどうかはわからぬが、少なくとも間違えではなかつたと言える。冴子との関係は円満といえる。そんなことを彼女の前で口にすれば笑われるかもしないが。

いつの間にか眠りについていたようだ。目覚まし時計の針がちょうど百八十度に開いている。久々に早寝早起きをした。たまにはいいものだ。地元に帰り、パルサーとアストロを交換した。岡山に戻つてきてもまだ十時にはなつていなかつた。昨晩読んだ内容を復習するように小島九段の本をまた読み返した。

一時半に大供パーキングで待ち合わせをすることにしていた。スーツはフィットのダブル。僕は式に出るわけではないからフォーマルな服装をする必要はないが、身なりには気をつけねばならない。髭も三日ぶりに綺麗に剃つた。外は気温がかなり上がつているようだ。昨日の雨が嘘のように青空が広がり、朝にはあつたはずの水たまりはどこにも見当たらなかつた。

ビリヤード店に車を取りに行くと、この時間には珍しく客が玉を突いていた。心地良い衝突音がする。かなり上手い打ち手なのだろうと思う。同じ打つでも麻雀とビリヤードは全く違う。僕はどちらも“中途半端に上手い”。中は覗かず、アストロに乗り込んだ。

大供パーキングの前に自分の車を駐車し終えた依頼人が立つていた。一昨日に見た時のスーツとは違い、かなりフォーマルなものを着込んでいる。元々、顔が年齢より若く見えるからか、スーツに着

せられているという感じがしないでもない。助手席を指差すとすぐに乗り込んできた。

「大きな車に乗ってられるんですね」思えば依頼人が、僕が車に乗っている姿見るのは初めてだつた。

「ええ。人を乗せるにはちょうどいいですかね」借り物だとはもちろん言わなかつた。

大供パークリングから教会までは五分もかからない。つかぬ間の会話だつたが、依頼人からは焦りや不安は微塵も感じられなかつた。一昨日、自分の無力さを涙ながら悔やんでいた情けないサラリーマンとは別人のように感じる。

教会の一区画前の路上で停車した。

吉本は大きく息を吸い込んで「では行つてきます」と言つた。

「健闘を祈ります」「成功を祈る」とは言わなかつた。

「よろしくお願ひします」車から降り教会に向かつて歩いていつた。姿はすぐに見えなくなつた。

車内のデジタル時計は一時前を示していた。スーツやドレスを着た若者が車の横を通つていつた。他の出席者どころか花嫁に対抗意識を燃やしているような服装の女を何人も見かけた。

サイドミラーに車椅子に乗つてゐる女性が見えた。タキシードを着た男性がその車椅子を押してゐる。直感的に園田佳子の母親なのだろうと思つた。車椅子を押してゐる男性は、昨日行つてゐた内縁の夫だろう。ミラーに移る一人の姿が徐々に大きくなつて行き、ミラーから外れ、車の横をゆつくりと歩いていつた。

男性の姿を見て、僕は目を疑つた。マスターだつた。

いや、正しくは前マスターだ。先週会つたばかりで、タキシードを着てゐる姿は店で見る彼と大差ない。昨日、園田家に電話をかけた時の様子を思い出した。最初に電話を受けた男性の声が、以前聞いたことがあるように感じたのも納得がいく。今思えば、あれはマスターの声だ。間違いない。そう考へれば滝本くんが話してゐたこ

とにも説明がつく。それまでたまにしか見掛けなかつたマスターの姿を六月に入つて頻繁に見たこと、同じ曲を何度も弾いていたこと……娘の結婚式の披露宴で弾くためだつたのかもしない。いや、きつとそつだ。

同時にある考えが頭の中で急速に広がつていつた。なんという不運な偶然だらう。僕はマスターの娘の結婚式を混乱させることの片棒を担いでいる。まだ籍を入れていなかつたら戸籍上はマスターの娘ではないが、そんなことは問題ではない。

煙草に火を点け、ゆつくりと深く煙を吸い込んだ。落ち着かなければならぬ。このシゴトには私情を挟んではいけない。いつ何時、何が起こるかわからない。こういう偶然が起こることだつてなくはない。僕は依頼人からシゴトを請け負い、報酬の対価となる十分なシゴトをこなすだけだ。ただそれだけだ。

頭を整理するまでさらに一本の煙草を要した。二時二十分になつていた。三時から式だが、依頼人はもう牧師に自分の意向を伝えていることだらう。

長針が三十分を指した時、突然、依頼人が車に戻つてきた。目は充血し、薄つすらと光るもののが見えた。

「どうしたんです？」

「車を出してください」 やけに落ち着きを払つた声で言つた。

「わかりました」 サイドブレーキを解除し、車を動かした。わからましたとは言つたものの、どこに行けばいいのかも、何があつたかもわからぬままだつた。一旦、幹線道路に出て、来た道とは違う道で大供パークリングに行き、迎えに来た時と同じ場所に停車させた。依頼人は終始無言で時折小さくむせぶよづな声を出した。

「何があつたんです？」

重々しい沈黙が訪れた。その間、煙草を一本吸つた。時間にすれば五分くらいだらうが、何時間も経つてゐるようを感じた。

「佳子と話をしました」 その一言を皮切りに溜めていたものを吐

き出すように一気に話し始めた。

「牧師さんの控え室の前まで行きました。偶然、佳子がそこに坐っていました。向こうはもちろん驚いていました。僕も驚きました。もう二年も会っていないのですから」

「そこで何があつたんです?」

「久々に会つた友人のように近況やここ二年のことを持ちました。とても幸せそうでした。幸せだとも言つていました。何をしに来たかも忘れるくらいでした」そこで黙り込んだ。さつきより大きな声で話し始めた。

「おめでとう、という言葉しか思い浮かびませんでした。彼女は泣きながら、ありがとうと言い、連絡を自ら絶つたことを謝り始めました。話を終え、教会から出ました」

その間、彼は真っ直ぐ正面を見据えたまま、時折、頬を搔くような動作をした。涙を拭っているのかもしれないが、横は振り向かなかつた。

彼は勇気がなかつたのかもしれないし、式を打ち壊したくないという配慮をきかせたのかもしれない。後者なら僕に依頼する前に断るべきだつたが、けしかけたのは僕の方だ。しかし、罪悪感は全く感じない。彼が依頼したことであるし、結果はどうあれ納得できる形になつたのは確かだろう。

「どうぞ」内ポケットから茶封筒を出した。三万円が入つてゐるのだろう。

「結構です」

「いえ、受け取つてください」

「今日、僕がしたことといえば、あなたを教会に連れて行つたぐらいです。それで対価は受け取れません」ガソリン代を差し引いても日当一万を受け取つたことになつてゐる。十分だ。

「そうですか。わかりました。お世話になりました。また何かあつたらお願ひします」

「ええ。もちろん何もないことを祈つてます」

「そうですね」ドアを開けた。「タバコを一本いただいてもいいですか？」

「二Jの煙草はかなりきついですよ」

「大丈夫です。一度くらい吸つてみたかつたんです」

「初めてだと吐き気を催したり、目眩がしたりするかもしれないので、家に帰つてから吸つてくださいね」

「わかりました。気を付けます。本当にありがとうございました」「駐車上に向かう彼の後姿を見送つてから発車した。マンションには寄らず松下の家に向かうことにして。車を走らせている間、さつきの彼の言葉を思い浮かべた。

彼はある煙草を吸うだろうか？ 今後、僕に限らず、僕のよつな人間に仕事を依頼することはあるだろうか？ どちらもないとと思つ。予想というよりは希望かもしれないが。

パルサーに乗り換え、ビリヤード店の駐車場に戻つてきたのが四時過ぎだつた。今月分の駐車料金を渡すついでに久々に玉を突くことにした。日曜といふこともあり、多くの人が突きに訪れていた。僕は一人黙々とナインボールに打ち込んだ。クッショーンを二つ通す練習に大半の時間を費やしたが、まだまだ先は遠いとわかつた。ちよつび七時になつたところで打つのを止め、アモールに向かつた。

店に入つてすぐピアノがなくなつてゐることに気が付いた。「いらっしゃいませ」とにこやかに笑う滝本くんにピアノの所在を尋ねた。

「あの次の日、といつても昨日ですね。昨日の三時ぐらいに三枝さんがお見えになつて、ピアノを持って帰られましたよ」

「そなんだ」

「そういえば面白い話がありました」娘が結婚するといった類の話だろうか。

「どんな？」

「自分が辞めてから古藤さんが来たか、って訊かれました。それでハイって答えると、『じゃあ彼がピアノを弾いたんだね』って言ってましたよ。僕は一言も言ってないんですけどね。ちょっとビックリしてそれ以上は訊かなかつたんですけど」

僕らは黙つたまま見つめ合い、相手の頭の中を透視するように考えを巡らせた。マスターの超能力を見破れるアイデアは一つも浮かばなかつた。ビールを頼んだ。

「長年引き込んでいるみたいですし、心が通じ合つているのかもしれませんね。もしかしたら、ピアノが教えてくれたのかもしれませんよ」

「それだ！」　冗談で言つた滝本くんの言葉で謎が解けた。

「え？　わかつたんですか？」

「ピアノの声だよ。とはいつても椅子の金属音だけね。一昨日、あの椅子の高さを調整しようとしたら、擦れ合つ音がした。何年も高さをえてないし、変える必要がなかつたから油も注さなかつたんだと思つ。俺には悲鳴のようにも聞こえた」

「ああなるほど」　納得したような返事をしたが、ビールを注ぎ終えてから、「でもそれだと自分以外の人間が弾いたことはわかつても古藤さんが弾いたと日星を付けていたことの説明はつきませんよね？」と言つた。

「確かにね。でもあの人は洞察力は凄いし、身長だけじゃなく座高からも割り出したのかもしれないよ。あとは僕とジャズピアノの話をしていたつてことから予想を立てたんじゃないかな」

「確かに三枝さんは凄かったです。僕が今まで出会つた中で一番鋭かつたと思いますよ」

結局それが僕たちの結論になつたが、はつきりとはわからなかつた。

今日は日曜だが、客足が途絶えることはなかつた。滝本くんも上機嫌だつた。シェイクする手付きが一昨日とは見違えるほど、巧かつたように思つ。オンナの話から、いつ頃に結婚したいかという話に

なつたところでまたマスターの話題が出てきた。

「昨日、帰り際に『明日、娘が結婚するんだ』と仰っていました。凄く嬉しそうでした。娘と言つても奥さんの連れ児らしいんですけどね。その奥さんは内縁らしくて三枝さんも今年中に籍を入れるらしいです。あまり自分のことは話さない人だつたから余計驚きました。古藤さんはご存知でしたか?」

「いや、初耳だよ」嘘ではない。耳にするのはこれが初めてだ。  
「この前古藤さんも弾いてたジャズの曲を演奏することになつてい  
たみたいで。それで熱心に練習していましたんですね」

「へえ、そうなんだ。ワルツ・フォー・デヴィーね」

「あとどこで開くかはわからないんですけど、自分の店を持つつも  
りだとも言つてました」

「滝本くんも負けないようになんばらないとね」

「そうですね。これからもよろしくお願ひしますね」

五杯目に頼んだX-Y-Zを飲み干し、最後に一杯チャイサーを飲んでから店を出た。

それから一ヶ月半が経つたくらいだろうか。気温は三十度を超え、滴るように汗が落ちるぐらい暑い真夏の日だった。一時前。仕事の待ち合わせがあり、マンションから田町に向かつて歩いていた。不意に聴いたことのある曲が耳に入ってきた。ピアノの曲だ。引き寄せられるように、音が発せられる方に足を運んだ。

モルタル造りの二階建て、一見するとイギリス映画に出てくるアパートのような建物だ。この建物は前からあつたとは思うが、気にしてみたことがない。全て飲食店が入っているようで一階の入り口の横には下に伸びた階段があつた。地下といえるほど深くはない。扉には「DEBBY」というプレートが掛けられている。扉の前まで降りていった。ここから流れているらしい。生のピアノの音だ。プロにはほど遠いが、優しさを感じさせるピアノだ曲は『rome

ude blues』。レッド・ガーランドの曲だ。かつて、一人だけこの曲について語り合つたことがある。僕はその人が演奏している姿を見たことは一度もない。確かめたいという衝動に駆られた。この曲が終わつたら扉を開けよつ、そう思い扉の前で目を瞑つたまま曲が終わるのを待つた。『prelude blues』が終わった途端、すぐに次の曲が始まった。

ワルツ・フォー・デヴィー

姿は見えないのに演奏者の姿が徐々に頭の中で具現化してきた。確かめる必要はなかつた。それにはまだ店は準備中だ。

僕は階段を上り、田町に向かつて歩き始めた。三十メートル進んだ所で後ろを振り返つた。何かが見えた気がしたがよくわからなかつた。目を凝らしても太陽の熱でアスファルトのすぐ上の空間が歪んで見えるだけだった。また前を向き僕はまた歩き始めた。きっと僕の頭の中で投影された映像だらつ。

見た事もない少女が、父親というには若すぎる壮年の男性が弾くピアノに合わせて、ワルツを踊る姿を見た気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4987f/>

---

Waltz for Debby

2010年10月8日15時20分発行